

えひめ Ehime Health Report

健康だより

CONTENTS

- 東日本大震災被災地支援活動 報告 1~4
- カンボジア結核対策スタディツアー2010に参加して 5
- 複十字シール運動 がん征圧月間 5
- インフォメーション 6



道後温泉本館（愛媛県松山市道後湯之町）



財団法人 愛媛県総合保健協会

東日本大震災被災地 支援活動報告



保健部 健康増進課

保健指導係 青木江里佳

4月17日から5月7日までの3週間、保健師3名にて1週間ずつ東日本大震災被災地支援活動に参加いたしました。本稿では、支援活動の内容や被災地の状況などを簡単に報告いたします。

派遣地・日程

岩手県下閉伊郡山田町

(宮古市と大槌町に挟まれ、山田湾を望む沿岸部の人口約2万人の漁業町)

4月17日～23日 青木(第4班)、4月24日～30日 細川(第5班)、
5月1日～7日 松本(第6班) ※班番号は結核予防会本部の番号

山田町の被災状況(5月12日現在)

収容遺体数 585体、安否不明者 299名、家屋全壊2638戸

結核予防会による支援活動の経緯と参加の契機

震災から5日後の3月16日、被災地支援のため結核予防会本部にて「東日本大震災対策委員会」が立ち上げられ、厚生労働省災害対策本部と岩手県並びに宮城県対策本部が支援活動を調整し、被災者の健康を守るための支援と結核を中心とする感染症対策のために、被災地の支援が開始されました。また、これに先立ち3月15日からは結核予防会岩手県支部が中心となり、宮古地区、陸前高田、釜石地区など3班で活動が開始されていました。宮古地区の山田町では被災者への医療支援体制が整いつつあったものの、担当保健師が過労で倒れるなど、健康支援の体制整備に向けた課題が多かったことから、その後の予防会活動の支援拠点を山田町として、全国の支部に要請して支援活動を続けていくこととなりました。

連日の震災ニュースを目にする中で、保健師という同じ職種にある者の一人として通常業務に就きながら何もできない無力感を抱いていたところ、結核予防会本部から支援協力要請の打診がありました。私たちが少しでも役に立つことがあれば、ぜひともご協力したいと思い要請を引き受けました。



山田町役場(1階が浸水被害)



役場のふもとに広がる住宅地は
ほぼ全壊被害

おもな支援活動内容

山田町大沢地区にある避難所（ふるさとセンターと大沢小学校）で避難生活を送っている方々と、被災が少なく自宅で生活している家庭に対して、健康状態の確認（血圧測定や検温・問診など）と訴えなどの聴取を通して、被災した方々のニーズの把握と調整役が支援活動の主なものでした。



桜が開花した大沢小のグラウンド



鯉のぼりが泳ぐふるさとセンター

避難所活動

集団生活が招く問題と復興に向けて

毎日2回避難所を訪問し、健康チェックを希望する方や地元ボランティアの女性から依頼された方々に対して、血圧測定や検温、問診などを実施しました。大沢小学校では5月2日にノロウィルスが発生し、家族隔離と消毒などの作業も実施しました。幸いに結核患者の発生はありませんでしたが、集団生活が続くことで感染症拡大に対する予防も支援スタッフの重要な活動となりました。

集団生活における問題は、感染症発生リスク増の他に健康状態の悪化などが挙げられます。長期避難生活によるストレスに今後の生活についての不安などが重なり、不眠となる方も少なくありません。集団生活で復興に向けて団結する一方で、集団生活に耐えられず、退所する方もいました。仕切りもなくプライバシーが確保されない空間で、今後の不安を抱えて生活している方々の中には、震災前は高血圧でなかったが震災後血圧が高くなっている方が多い印象を受けました。やはり一番必要なことは、一日も早く仮設住宅へ入居することだと感じました。

ふるさとセンターでは、共同生活のルールを作成し、1週間交替で避難所を運営する当番（配膳やトイレ掃除など）があり、その役割分担が避難所での生活リズムをつくる大切な力となっていました。また、個人差はあるもののひとりひとりが役割を持つことがやりがいにつながり、入所者同士の協力体制のきっかけとなり、少しずつ前向きな気持ちになっているようにも感じました。被災した自宅の2階を住めるように整備して自宅に戻る方、他の地域や県外へ引っ越す方など、入所者数も毎週少しずつ減り、それぞれが新しい生活に向けての準備をしていました。一方、地元を離れたくない方々にとっては、住み慣れた地区に仮設住宅が建つことを望んでいます。山田町は沿岸部のため被災者全員に必要なだけの十分な敷地が確保できないため、入居できるまでの課題と入居後に起こりうる問題も残されています。

震災前から医療支援が必要な家庭への負担増

震災前から在宅ケアを利用していた家庭や、入所施設が倒壊して帰宅を余儀なくされ家族の介護負担が問題となっている家庭、親族や近所のお宅へ10名以上で身を寄せて共同生活を送っている方々など、継続した訪問活動が必要な家庭へは毎週1回以上出向いてその情報を次の班へ引き継ぎ、継続した訪問活動を実施しました。

訪問を通して、震災前から家族の負担が大きかった家庭が、震災後さらに問題が深刻となっている現状が浮き彫りにされました。施設の倒壊やスタッフの被災で、十分なサービスが提供できなくても、震災前から在宅ケアを利用していた方々のニーズに少しでも応えようとしている現状もうかがえました。継続した訪問活動が必要である一方、支援スタッフも一週間で交替してしまうため、被災者と支援者との信頼関係を構築することが非常に難しいのも現状です。遠隔地からの支援参加に労いの言葉をかけてもらったり、来客扱いの対応を受けるなど、被災していながら私たちに気を配るという負担をかけてしまっていることを非常に心苦しく感じました。



震災後、家族で裏山へ逃げる階段を作り、余震の度に90歳をこえる母を娘が背負い、この階段を上ったと聞きました。



被災者全体の問題

①食事の偏り・運動不足・ストレス・未受診による 病状悪化

②生活不安・緊張感・介護疲労から 新たな患者増（高血圧・肺炎・鬱病など）

食生活の偏りなどから慢性疾患の病状が不安定になったり、悪化してしまったりという問題と、長期にわたる避難生活により心身疲労から新たに高血圧や肺炎、鬱病を発症したりという、被災者全体で共感できる問題がある一方で、家屋の倒壊など被災が大きかった方と、少なかった方の間で遠慮や不満などの発言を耳にすることもあり、お互いに同じ被災者でありながら、被災状況の差により複雑な心境を互いに持っているという実情もありました。被災状況に拘らず、被災した方々全員が一日でも早く安心した生活に戻る対応が切望されます。

支援活動に必要な心構え

①支援の限界を踏まえた上で最大尽力をそそぐ

- ・慣れない土地、スタッフ、不十分な情報、1週間という短期間の中でスムーズな支援を行うことには限界があるという認識を持つことが支援終了後の気持ちの落胆、悔みなどの軽減につながります。また支援に参加したスタッフ同士の声かけも大切です。

②被災者の思いを聞き逃さない・負担をかけない配慮を

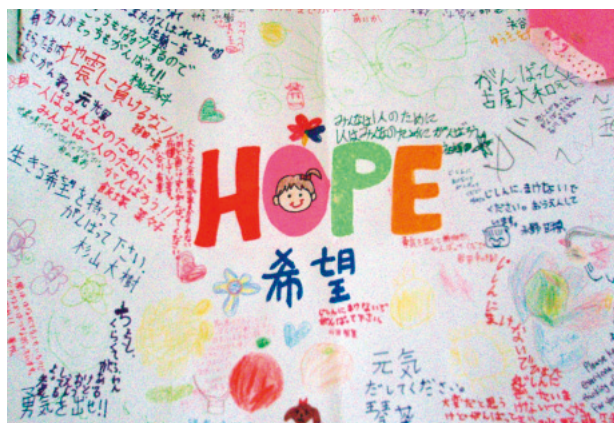
- ・支援スタッフが定期的に交替するため、情報の引き継ぎが被災者の安心と再度情報を提供しないといけないという負担の軽減につながります。支援に入ることによって被災者を逆に疲れさせていないか、注意を払うことが大切です。

支援に参加して

テレビで連日放映されていた光景を目の当たりにした衝撃は、覚悟していたものの想像以上でした。事実、震災直後のもっと悲惨な光景を目の前に捜索活動や医療支援活動などに従事した方々の心身の疲労が現在とても深刻な問題となっています。被災者はもちろん、支援活動に従事する方々の健康支援も含めた災害支援活動体制が今後ますます充実していくことが大切だと感じました。

最後に、貴重な機会を与えていただいた関係者の皆様、私たちを受け入れていただいた被災地の皆様に心から感謝いたします。

刻一刻と時は過ぎていきますが、一人でも多くの方が新たな生活に向けて希望を持てる時間となっていくますよう、心からお祈り申し上げます。



大沢小に届いた県外の小学生のメッセージ



支援スタッフが着用したジャンパー

カンボジア結核対策スタディツアー 2010に参加して

愛媛県結核予防連合婦人会

事務局長 上田 和子

平成22年11月22日から全国の結核予防に関わる婦人団体の人たちの10名で結団式を終え、ホーチミンで乗換えブノンペンに夕方到着した。

初めの日に、日本結核予防会は、G8で締結したグローバルファンドの技術提携をすることになり、その調印式にも参加できたことは光栄なことだった。



8日間の間には、結核予防センター、ヘルスセンター（診療所）や国が管理している縫製工場の医務室(集団検診をする)だけでなく、日本人女性が頑張っているアンコール小児病院、女性保護施設レセナール、スナーダイクマエ孤児院を見せてもらった。日本女性がカンボジアの人たちに、この国で生きていけるようにと支援している様子を目の当たりにし、日本人として誇らしかった。

アンコール小児病院では15歳までは、無料で診てもらえ、食育指導もしている。レセナールでは、生活していくための技術を身につけるよう訓練施設に通わせてくれている。スナーダイクマエ孤児

院は、カンボジアの誇りをもつことのできる子どもたちを育てている。

CANETを中心にして、カンボジアでは、薬を服用する習慣がなかなか身につかないので、50歳以上のリーダーがボランティアで6ヶ月間の間、薬を飲むことを確認するために各家を回っている。DOTS対策である。

DOTSは、カンボジアで普及するには、10年かかったという。

ヘルスセンターのおかげでカリエスが完治したという女性のお宅へも訪問させてもらった。まだ、自由に身体を動かすことはできない様子だったが、ヘルスセンターの重要性を感じた。このカンボジアスタディツアーで、便利になった私たちの暮らしは、何か忘れ物をしたようなそんな気にさせられた。

外国支援が8割なければ成り立たないカンボジアを後にして、もっと私たちは、日本という国に誇りをもって愛さなければいけないとさえ思ったくらいだ。

そんな思いをして帰って数ヶ月がたったとき、東北大地震が起こった。宮城県の友人のメールでは宮城県は、支援がなければ立ち直れないと書いてあった。

支援は、一時的なものでは、形として現れない。カンボジアのように10年掛けてやっと形として現れるのである。長く続けていくことの必要性を感じている。今こそ、つながり合う婦人会の活動を多くの人に知ってもらえるように活動をしていきたいと思っている。

複十字シール運動

複十字シール運動は、結核予防を目的に世界の約80ヶ国で行われ、結核や肺がんその他の胸部疾患をなくすための活動資金を得るために行われる募金活動です。

日本では、結核予防会が昭和27年から複十字シール運動を始め、結核撲滅のため8月1日～12月31日にかけてこの運動を全国的に展開しています。

募金をして頂いた方に複十字シールを差し上げ、それを使うことで結核予防の輪を広げていただく「複十字シール運動」へのご協力をお待ちしております。



がん征圧月間

今年度のスローガン 「健やかな 未来のために がん検診」

9月1日から30日までを「がん征圧月間」として、全国的にがん撲滅運動が展開されます。愛媛県では、年間約4,500人（平成22年度）の方ががんで亡くなっており、特に肺がん、大腸がん、乳がん等が増加しています。

今年度も、当協会と愛媛県医師会の共催により、がんに対する正しい知識とがん検診受診率向上を広くアピールする普及啓発運動を推進して参ります。

また、がん征圧事業にご参加いただくための「がん募金」も行っております。この募金は、がん予防知識の普及や学術研究などに活用させていただいています。皆様のご協力をお待ちしております。



（複十字シール運動、がん募金についてのお問合せ）財愛媛県総合保健協会 精度管理室 Tel 089-987-8220

インフォメーション



2010 年度 結核フォーラム in えひめ 開催

去る3月12日(土)、「結核フォーラムinえひめ」が当協会で開催され、市町の保健担当者を始め、医療・福祉従事者など約150名が出席しました。

■特別講演

「多剤耐性結核について」

講師 鈴木 克洋（近畿中央胸部疾患センター 統括診療部長）

■講演

「愛媛県における結核診療の状況」

講師 阿部 聖裕（愛媛病院 統括診療部長）

「医療機関における結核感染対策について」

講師 篠原 理佐（愛媛病院結核病棟 看護師）



愛媛県立医療技術大学 臨地実習を終えて

2011年3月、県立医療技術大学の学生9人が、2週間にわたり当協会で実習を行いました。



地域・職域・学校健診の方で実習させていただきました。機械の操作や精度管理の重要性、検査結果の値が信頼できるものなのかどうかの判断の仕方について学ばせてもらいました。大変貴重な2週間で、とても楽しく実習をさせていただきました。ありがとうございました。（健診部実習生）

臨地実習で貴協会に來させていただきました。教科書だけでは学べない現場だからこそ学べるような事を色々と熱心に指導していただき、一回り成長して学校へ戻っていきそうです。（健診部実習生）

貴協会での実習で初めて実際の現場での臨床検査業務を見学体験させていただきました。健診現場の見学など学内では学べない内容が勉強でき貴重な経験になりました。（健診部実習生）



病理検査室では染色までの過程を身をもって経験でき、大学で学んだことをさらに発展できたと考えています。実習を通してさらに病理に興味をもちました。丁寧なご指導をいただき、本当にありがとうございました。（病理実習生）

病理検査部の臨地実習を終えて、更に病理への関心が深まり仕事場の雰囲気を経験することができました。ご指導いただいた方々、本当にありがとうございました。（病理実習生）

以前から細胞診に興味があったが、病理検査室での実習を通して、学校では学ぶことのできない多くの知識を得ることができ、病理への関心がより一層強くなった。日々新たな発見があり、探究意欲の尽きない毎日だった。（病理実習生）



主に水質検査を行いました。学内では検体を血液や喀痰などとして行ったため、同じ細菌検査でも初めて行う検査もあり、環境部においても学内では扱うことのない機器を用いた実習で貴重な体験となりました。（環境検査部実習生）

今回、私は環境検査部門へ実習に行かせてもらいました。細菌検査室においては検査技師の方々が、環境検査では専門分野の方々が活躍しており、丁寧に優しくご指導して頂き、私の中で臨床検査の幅が広がった本当に楽しく有意義な実習となりました。（環境検査部実習生）

今回の実習では、細菌検査部門と環境部門の2つの部門で、学ばせていただきました。学内では学ぶことができなかった検査方法や機械などについて、丁寧に分かりやすく説明していただき、とても勉強になりました。（環境検査部実習生）



 財団法人 愛媛県総合保健協会

〒790-0814 愛媛県松山市味酒町1丁目10番地5
<http://www.eghca.or.jp>

〔個人情報の取り扱いについて〕

本誌を送付させていただいている皆様のお名前、団体名、事業所名、住所は、当協会の個人情報保護方針に基づき、厳重な管理の下に運用しております。
個人情報の訂正及び削除を希望される場合には、お手数ですが企画広報係(089-987-8208)まで御連絡ください。